

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5649号

3月号

令和3年3月25日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



## 【特に注意を要する事項】

期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

## 【予報のポイント】

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に期間の前半はかなり高くなる見込みです。

## 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	20	70
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	30	40

## 【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。

平均気温は、高い確率70%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率50%です。

### <1週目の予報> 3月27日(土)～ 4月2日(金)

前線や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

### <2週目の予報> 4月3日(土)～ 4月9日(金)

天気は数日の周期で変わるでしょう。

### <3週目から4週目の予報> 4月10日(土)～ 4月23日(金)

天気は数日の周期で変わるでしょう。

## 普通作物

### ◆早期水稲

---

#### 1 水管理

活着までの約一週間は茎葉からの水分蒸散量を抑えるために深水とします。その後、暖かい日は浅水で水温上昇に努めます。晩霜の予報が出された場合は深水で保温します。

#### 2 病虫害対策

いもち病の対策として、箱施薬を行います。田植までに施用する場合は、箱施薬剤と除草剤と取りちがえないよう注意します。移植後の余り苗は、いもち病の発生源になるので、補植後直ちに処分します。気温が高いとスクミリングガイ（ジャンボタニシ）の活動が活発になるので、発生田では、浅水管理や薬剤での防除を行います。

#### 3 除草対策

使用時期は除草剤によって決められています。除草剤のラベルを確認の上、ほ場全体を見渡して、雑草の生育状況を確認し、散布遅れにならないよう注意します。寒害に遭った場合は、除草剤の効果の範囲内で、稲の回復を待って散布します。散布時は、ラベルに記載された水深を遵守します。予め畦や水尻からの漏水を点検し、散布後1週間は水尻をしっかりと止めてください。田植同時処理をする場合は、薬害が出ないように移植後の土のもどりや入水に注意します。散布遅れや水管理不足等で雑草が残ってしまった場合、中後期除草剤を遅れないように処理します。

### ◆麦類

---

赤かび病防除のため、小麦では穂揃期（開花期）に、二条大麦では穂揃期から7～10日後（葎殻抽出期）に防除し、その7日目頃に2回目の防除を行います。今年は生育が早く、防除が遅れないように注意が必要です。

収穫までの登熟日数は出穂後小麦で45日、二条大麦では40日程度です。湿害を回避し、収量の安定化のために作溝するなど排水対策を徹底します。

（荒砂 英人）

## 施設野菜

### ◆きゅうり

---

日中の気温上昇と、日射量の増加に応じてかん水量を増やします。また、葉に強い直射日光が当たると、葉の老化や葉焼け症等が発生するので、日中はカーテン等を利用し、日射量を調節します。湿度の低下は、曲がり果や尻細果等の発生につながるため、ハウス内が乾燥している場合には、通路散水等による湿度確保に努めます。アザミウマ類で媒介されるきゅうり黄化えそ病の発生が続いています。害虫の飛込みを防ぐため、防虫ネットの点検を行うとともに害虫の防除を徹底します。

### ◆ピーマン

---

夜温が上がり、暖房機が稼働しない日が続くと、ハウス内の湿度が高まり病害が発生しやすくなります。ハウス外の最低気温が14℃以上の場合には、カーテンは開けたままにし、暖房機が稼働するように管理します。また、日焼け果等の発生防止のため、日中はカーテン等を利用し、日射量を調節

するとともに、換気に努め、ハウス内の温度は30℃以下で管理します。

茎葉が繁茂し、光線の透過不足等による白果や収穫遅れによる赤果の発生、成り疲れ等によるうどんこ病の発生が予想されます。適期収穫を徹底し、光線を遮っている茎葉の整枝・せん定を行います。また、土壌水分が不足すると草勢が著しく低下するため、こまめなかん水・追肥による草勢維持に努めます。

## ◆トマト

---

ミニトマトは気温上昇に伴い裂果が多くなるので、収穫時の着色度合いを調整します。また、空中湿度を下げるために日中の換気を徹底し、収穫遅れがないよう適期収穫に努めます。

大玉トマトは、高温で乾燥すると尻腐果の発生が多くなるので、かん水量を徐々に増やします。また、草勢が低下すると小玉果となり、軟果玉や裂果が発生するので追肥が遅れないように注意します。

## ◆いちご

---

収穫も終盤となり、次年度用の育苗作業に移ってきます。特に、炭疽病の発生等による苗不足は収量の減少に直結します。炭疽病の発生を防止するために感染していない健全な親株を使用するとともに、感染の疑いのある苗は周囲の苗も含め早期に除去・処分するなど、万全の対策を実施します。

(吉山 健二)

# 葉茎根菜類・いも類

## ◆栽培ほ場の土壌水分の確保

---

今月は上旬からマルチ栽培のかんしょ、さといもの植付け及び各種夏野菜のは種適期です。土壌が乾燥した状態でマルチ被覆を行うと、発芽不良や生育障害、品質低下につながるため、適当な土壌水分（手で握って団子になる程度）の時に畝立てマルチ張りを行います。

## ◆さといも

---

早生種のマルチ栽培は萌芽の時期です。萌芽を開始したらマルチに穴を開けて芽出しを行います。また、中生さといもは植付け期です。

近年、深刻な被害を及ぼしている疫病の伝染を防ぐため、種芋を取った後の残さは付近の空き地に絶対に放棄せず、速やかにほ場でロータリー耕耘を行い、細かく破碎し分解させるか堆肥化します。

## ◆食用かんしょ

---

露地栽培の植付けが始まります。苗は灌水を徐々に減らし、外気に徐々にさらして馴化させます。上旬は遅霜や平均気温が下がることから植付け後の活着が悪いので、気候の変化に注意します。採苗は植付け予定の3～5日前の午後に行い、苗を切り取る高さは地際から5cm以上離し、切り取った苗は速やかに病害防止のため薬剤処理をします。調整後の薬剤は日光や汚れなどで分解しやすいため、一日を目安に使い切ります。

苗は温湿度を保ちながら数日保管すると発根が良くなります。

なお、育苗中に地際部からの茎の枯れや黒変、芋の腐敗が発生したら速やかに育苗床から撤去します。その際は、他の苗との接触を避けるため、撤去する苗のそばまで肥料袋などを寄せ袋に入れ込みます。苗や芋をそのまま持ち歩きません。

## ◆スイートコーン

---

大型・小型トンネル栽培は、4月上～中旬の雄穂抽出期が追肥の時期です。雄穂が出始めたら窒素成分で10aあたり5～6kgを追肥します。雄穂抽出から10日～2週間後に雌穂（絹糸）が抽出し果実となります。また、ボリュームがあり、先端まで充実したスイートコーンを生産するためには土壌水分が必要なため、通路への湛水等を行います。さらに、トンネル内の高温による葉焼け等を防止するため、ビニールの開閉管理や除去には十分注意します。株元からの分けつは光合成して養分確保を行うので、除去しません。

(川崎 佳栄)

## 果樹

### 1 常緑果樹

---

#### ◆かんきつ全般

今年は平年よりも気温が高い日が多く、開花が早くなることが予想されます。発芽から開花までの期間が短いと、花の充実不足に伴う生理落果が多く見られます。新梢や花芽の充実のために、発芽期から開花期にかけて、窒素主体の葉面散布を数回行います。

#### ◆完熟きんかん

まだ剪定が終わっていない園は、必ず四月上旬までに実施します。たっぷりのかん水、春肥の施用、完熟堆肥等の有機物の投入によって樹勢回復を図ります。

発芽揃いを良くするために施設内の蒸し込みを行うとともに、新梢の充実を図るため、窒素主体の葉面散布を数回行います。

#### ◆マンゴー

早期作型の本格的な収穫時期です。収穫が近づくにつれて果皮が弱くなり、果皮の結露が原因と考えられる「あざ果」や「やに果」が増加してきます。品質向上のために、ハウス内の急激な温度変化を防ぎ、ヒートポンプや早朝の換気による除湿によって結露を防止します。また、次第に日射が強くなり、日焼け果が発生することがあります。カーテンや遮光ネットを利用し、日焼けを防止します。

### 2 落葉果樹

---

#### ◆かき

摘蕾は生理落果後の摘果に比べて、樹体養分の確保や翌年の花芽分化に有効です。開花始め頃から二分咲までの間に実施します。1結果枝当たり1花を原則とし、長い結果枝には2～3花とします。

(鈴木 美里)

## 花き

#### ◆電照ギク

---

曇雨天の日が続くと、ハウス内湿度が高まり、白さび病が発生しやすくなります。親株における徹底した防除で本ぼへの持ち込みを防ぐとともに、定期的な予防防除を行います。

秋ギクの親株育成の時期です。作型や穂冷蔵の有無等の条件を考慮し、計画的に作業を進めます。

### ◆夏秋ギク

---

8月出荷作型の定植（直挿し）は中旬から順次行います。過剰施肥は生理障害の原因となるので、土壌診断結果に基づいた施肥を行います。

5、6月出荷作型の「フローラル優香」では、低温により貫生花が発生しやすくなるので、4月いっぱいまでは10℃、消灯後3週間程度は16℃の夜温を確保します。

また、「精の一世」の7月以前の出荷作型では、低温により幼若性を獲得する恐れがあるので、消灯前は13℃程度、消灯後は18℃程度の夜温を確保します。

### ◆スイートピー

---

受粉から子実の肥大期です。

つる下げにより草勢を弱めたり、採種率の低い品種は株を揺らしたりすることで着莢を促します。

また、充実した大きな種子を得るために、定期的にかん水や施肥を行います。

### ◆ホオズキ

---

7月出荷作型では、中～下旬にはマルハナバチを導入して着果の促進を図ります。なお、ハウス内温度が10℃を下回ると、花粉の発芽不良やマルハナバチの活動停滞により着果不良となりやすいので、保温に努めます。

### ◆シキミ

---

春芽の萌芽時期です。定期的な防除を実施し、黒しみ斑点病やサビダニ類の発生を抑えます。

### ◆ラナンキュラス

---

球根養成期です。

養成株は蕾をできるだけ早めに摘除し、徐々にかん水頻度を減らすことで、球根の肥大を促します。また、定期的な防除も忘れずに行います。

（藤原 明紀）

## 畜産

### ◆家畜防疫対策

---

令和3年3月24日時点で、鳥インフルエンザが県内6市町で12例発生し、全国でも本県を含む18県で52例発生しています。また、県内に飛来する野鳥の糞便からもウイルスが確認されています。渡り鳥が大陸に帰るまでは、鳥インフルエンザの発生リスクが残りますので、気を緩めることなく、侵入防止対策の徹底を行います。

その他の家畜伝染病から農場を守るためにも、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように、飼養衛生管理基準を遵守します。

## ◆家畜

---

今月は、外気温の日較差が大きくなり、家畜や家禽の免疫力が低下しやすくなるため、呼吸器病等の感染症が発生しやすい時期となります。

このため、朝夕の畜舎カーテンの開閉や舎内温度が上昇する昼間の換気扇による換気、細霧による湿度管理等を行い、舎内の温湿度環境を整えるようにします。また、病気の発生時は早期対処ができるように、家畜の健康状態の観察を徹底します。

## ◆飼料作物

---

今月は、早播きのトウモロコシやソルガムの播種時期です。作付けする前に土壌分析を行い、適切な肥培管理を行います。

イタリアンライグラスの収穫も本格化します。収穫適期の出穂期は、圃場全体の四～六割が出穂したときです。適期収穫を行います。

(大山 佐喜子)

## 特用作物

## ◆茶

---

### 1 防霜対策

一番茶の生育に合わせてセンサー設定温度の確認と防霜ファンの首振り角度や回転方向、スプリンクラーヘッドの詰まり等を確認し、誤作動により霜害が発生しないよう注意します。

### 2 芽出施肥と防除

芽出し肥は、硫安等の速効性肥料を摘採の二十五日前までに散布します。カンザワハダニは気温上昇に伴い密度が高まるため、発生状況に注意し地域の栽培暦に準じて葉裏にかかるよう丁寧に薬剤散布します。また、ツマグロアオカスミカメやマダラカサハラハムシ、コミカンアブラムシ等の発生にも注意します。

### 3 一番茶の摘採及び製造

単価アップのためには良質生葉の生産が不可欠です。茶工場の処理能力や一番茶の生育状況・降雨等を考慮し、「摘み遅れ」とならないよう摘採計画を立て適期摘採に努めます。また、事前に摘採機の刃研ぎや製茶機の点検・清掃・試運転等を行い、トラブル回避を図ります。摘採時は摘採袋等への生葉の詰め過ぎを避け、摘採後は速やかに（三十分以内）茶工場へ持ち込み、欠陥の無い荒茶製造に努めます。荒茶への異物混入防止対策にも、万全を期します。

(松尾啓史)

## ◆しいたけ

---

### 1 選別

乾しいたけは、用途に応じて取引されるので、商品価値を高めて販売するためにも、規格表を参考に選別します。特に、次の点に注意します。

①異物（ほだ木の樹皮、虫、金属類等）は絶対入れない。

- ②乾燥不良、虫害、カビ、黒子など規格外品は絶対に混ぜない。
- ③3 cm以下を他のサイズに混ぜない。
- ④バレと縁に巻きがあるものとは別々にする。
- ⑤できるだけ種菌、採取時期、日和子、雨子別に行う。
- ⑥丸形と変形とは区別する。
- ⑦湿度の低い晴天時（雨天時は避ける）を選んで行う。

## 2 箱詰め

箱詰めは、最初からたくさん入れずに、まず二分入れて揺すり込み、さらに四分、六分、八分と入れ、最後に十一分ほど入れて丹念に揺すり込みます。箱詰めがゆるいと、輸送途中で欠け葉を生じ、商品価値の低下を招く恐れがありますので注意が必要です。

## 3 採取

気象情報に注意しながら適期採取に努めます。

(古澤 英生)

## ◆たばこ

---

今月は、土寄・ほ地内環境整備と、収穫・乾燥に向けた準備が主な作業となります。

1 土寄は、植付け30日～40日経過して、作柄に応じて実施します。時期が早すぎると幹が傷つき、腰折病等の病害発生の原因となります。また、遅すぎると肥料吸収が遅れ、作柄が晩作化します。

不定根の発達を促進し本葉系を充実させるために、土寄は確実に実施します。植穴の固結や畦内土壌の固いほ地の対応として、土壌をほぐしながら穴埋めすることが大切です。特にローラー土寄を行なった際には、土が寄せられているか確認手直しを行い、株元までしっかり土寄を行います。

2 ほ地内に水が溜まると、生育不良や病害発生の原因となります。必ず、ほ地周囲や枕地に、ほ地の形状に合わせて排水溝を設置するように努めます。

3 異物混入防止のため、植付け穴のちぎれそうなマルチや、ほ地内に落ちているマルチ片を回収します。

4 収穫・乾燥へ向けて作業場・貯蔵庫の清掃、使用物品の点検更新、及び乾燥機の点検・空焚きを実施します。

5 農薬を使用する際には

「たばこ用農薬の使用基準」を遵守し、他作物へのドリフト（農薬飛散）が無いよう注意します。  
また、使用後には「農薬使用実績票」等に必ず記帳します。

(宮崎県たばこ耕作組合)

## 内容の詳細について

---

4月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

## 向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稻	いもち病	—	置き苗は、いもち病の発生源や伝染源となるため早めに処分します。箱施薬をしていないほ場で、イネミズゾウムシの発生が目立ち始めたら粒剤の水面施用を行います。 スクミリンゴガイの生息数が多い場合は、捕殺あるいは粒剤を水面施用します。また、用排水路からの侵入を防ぐため、水の出入口にネットを設置します。
	イネミズゾウムシ スクミリンゴガイ	— —	
野菜・工芸作物	アブラムシ類	並	各種植物ウイルス病を媒介するため、早期発見・防除に努めます。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病	やや多 並 少 並	平年に比べ、べと病の発生がやや多く見られます。既に発生が多いハウスでは、1週間間隔で複数回の連続防除を徹底します。 また、罹病葉は伝染源となるため、適宜摘葉し、ほ場外に持ち出します。  黄化えそ病の感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。 また、本病を媒介するミナミキイロアザミウマは、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいいため、最少でも7日間隔で3回の連続防除を行います。
	黄化えそ病 (MYSV)	並	
	ミナミキイロアザミウマ タバココナジラミ	少 少	
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病 黒枯病	やや多 やや多 並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が上がりにくいいため、予防・初期防除に重点をおきます。また、罹病した茎葉は重要な伝染源となるので速やかに除去します。 アザミウマ類は、気温の上昇とともに増殖しやすくなるため、発生初期に防除を行い、中～多発生のほ場では短い間隔で定期的に薬剤散布を行います。ヒラズハナアザミウマは主に花に生息するため、着花の少ない時期の丁寧な防除が効果的です。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ タバココナジラミ	少 多 やや多	
冬春トマト	灰色かび病 葉かび病 すすかび病 うどんこ病	やや少 やや少 並 やや多	気温の上昇により加温機の稼働時間が短くなり、果実等が結露しやすくなるため、循環扇を作動させるなど施設内環境の改善に努めます。 タバココナジラミは、気温の上昇に伴い活動・増殖が活発になる病が問題となっていますので、各人が防除を徹底し、地域全体の密度低下に努めます。
	タバココナジラミ	やや多	
冬春いちご	うどんこ病 灰色かび病	並 やや少	いずれの病害虫も多発してからでは根絶は困難なため、低密度のうちに定期的な防除を行います。 ハダニ類は複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群がいるため、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。 ヒラズハナアザミウマは寄生花率10%以上で被害果が発生する恐れがあります。低密度時に防除を徹底します。
	ハダニ類 ワシツコナジラミ ヒラズハナアザミウマ	少 やや多 やや多	
カンキツ	そうか病 かいよう病	— —	いずれの病害も、罹病した枝葉は重要な伝染源となるため徹底的に除去します。 ミカンハダニの要防除水準は、寄生葉率30%あるいは葉当たり寄生虫数0.5～1頭です。
	ミカンハダニ	少	
茶	カンザワハダニ	並	一番茶萌芽期以降発生が多い場合には、農薬使用基準の摘採前日数等に注意して防除します。

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。  
2) 宮崎県病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

